

## 雲南懇話会 追記項目 (南井英弘 作成)

## 1. 国際公募隊:

- ① ラッセル・ブライスやロシア隊などを除いた外国の公募隊は、「BCまでご案内しましょう。BCでの食事は提供いたします」といったタイプが多い。
- ② BCでの食事は提供するが、あとは自分で担ぐなりポーターを雇うなり、ご自由に高峰を登ってください!
- ③ ムスターグ・アタ、チョー・オユー、シシヤパンマのBCは人里離れたところにあり、現地人の雇用は不可能!
- ④ C1をはじめ、前進キャンプを設営できない人たちが沢山いる!
- ⑤ 日本からの公募隊は、基本的には参加者を全員登頂させる隊が多い。
- ⑥ 日本隊の行動を注目しており、日本隊が動き出すとラッセルやフィックス・ロープも使えるのでゾロゾロと登頂態勢に入り、動き出す。
- ⑦ 決してラッセルに加わるようなことはしない。
- ⑧ 100~200mほど後方で、ルートやフィックス・ロープの設置などルート開発状況を見ている。
- ⑨ 1度日本隊が登頂するやドンドンと頂上を目指して登る。
- ⑩ 頂上で写真を撮っている日本隊隊員に「早く下りよ、自分達の番だ」と下山を催促する。
- ⑪ 彼らは、まとまった隊からの参加者でなくバラバラな群れで勝手し放題となる。

## 2. 保険の付保:

- ① 私は日本山岳会の「登山者保険」を付保するだけでした。これはピッケルやザイルを使う高峰登山には適用されないようです。
- ② 友人が一昨年初、ランタン谷のヤラ・ピーク(5,520m)に登頂した際に、天候悪化で足指に凍傷を受けました。
- ③ ヘリコプターでの搬出費、帰国時の航空機座席のグレード・アップ、日本での入院治療費(指を切断)、通院タクシー代金を含めた大金を、保険会社が補償してくれた。
- ④ 保険会社は、**東京海上日動**

窓口は(株)東海日動パートナーズ大江戸(田中さん)0120-881-018

**保険種目は 海外旅行****期間は 通常の旅行に登山期間を割り増しで保険金を支払う**

彼の場合は、旅行期間 平成19年10月8日~26日(19日間)

割増期間は、平成19年10月14日~20日(7日間)

(ザイル、アイゼン、ピッケル等使用の登山)

保険金額 傷害死亡・傷害後遺障害・疾病死亡 各5,000万円

治療・救援費用 10,000万円

保険料 12,190円(合計)

## 3. 奇怪な本当の話

- A) ナンパラ; ネパール・クウーンブ地方とチベットの交易ルート標高(5,700m)

- ① 06年、チベット人射殺事件、
- ② **AAJ07**の中で、「06年、チョー・オユー登山最盛期に、チベットから大雪原のナンパラを超えてネパールに越境しようとした**75人のチベット人**のうち、1名が中国人に射殺され、他にも重傷者がいたが恐らく亡くなったであろう。**約40人は越境したが、残りは中国兵に捕らえられた**」と。この情景を銃声直後からBCで見ていたチョー・オユー南西面初登登攀のスロベニア人の報告と隠し撮りしたチベットの子供達の写真は衝撃的です。
- ② そんなこととは知らずにチョー・オユーBCから目前に展開されるナンパラの広大な雪原を往来する命がけの交易商人、ヤクのキャラバン隊の姿に感動していました。
- ③ TBC到着後、高所順応のため近辺の高みに登ろうとすると中国の国境警備隊に厳しく注意された。この事件以来神経質になっているのだろう。

## B) スパンティーク

(インターネット公開に際しまして、この節は削除いたしました。前田 記)

## C) 06 マナスル・チェコ隊：

- ① BCサイトにはチェコの公募隊がおり、2つのグループに分かれて行動していました。
- ②そのうちの2人のグループは我々と同日にC1入りし、その後も我々と同様に行動していました。
- ③ところがわれわれのアタック隊がBCに戻っても彼らの姿は見えず。心配していた。
- ④私達がサマ村に下山後、チェコ公募隊のガイドから3人のグループはBCに戻ってきたが他の2人を知らないかと照会あり。
- ⑤その後もついに無事帰還の知らせを聞きませんでした。
- ⑤ このガイドはBC建設には立ち会ったが、その後はサマ村で待機しており、公募隊員の行動は全く把握していなかった。

## 3. 「ゴンドコロ峠越え・トレッキング」は、ヒマラヤ登山です！

- ①最近のバルトロ氷河域に聳えるK2、G2、ブロード・ピークなど巨峰への登山隊の多くは従来のルート、アスコレからバルトロ氷河を遡行するのではなく、フィックス・ロープが張られている年は「ゴンドコロ峠」を往復路に使うことが多いようです。
- ②峠とは言いながら、5,500mを越えフーシェ側は太陽が照りだすと大小の落石がドンドン落ちます。99年にフーシェ側から登るべく取り付き点まで行きましたが、朝日が照りだし、ドラム缶ぐらいのや大小の落石がガンガン落ち始め、撤退した経験があります。
- ③また、峠のバルトロ側ヴァイン氷河の頭部は、大小のクレバスが無数にあります。
- ④旅行会社のトレッキング先として「バルトロ氷河からゴンドコロ峠越え」と記した宣伝広告を見ましたが、高所順応と登山技術が求められますのでお奨めできません。
- ⑤私達が吹雪のゴンドコロ峠を越えた日に、イタリア人のペアーがいました。私達は瀕死の仲間を背負って何とか猛吹雪の峠に着いた時、風雪に曝されながら女性がうずくまっていました。恐らく2時間以上もいたでしょう。
- ⑥「このままだと死を待つだけだ。一緒に行こう！」と立ち上がらせ、引きずるようにしてフィックス・ロープに安全環を掛けて下山させました。
- ⑦フィックス・ロープのスタート点から数m先は見えないほどの急斜面で足がすくみ、動けなかったのでしょう。
- ⑧その内、意識朦朧としてしゃがみこんでしまったようです。
- ⑨同行の男はこの急斜面のフィックス・ロープを頼りに先を急いだようです。
- ⑩助けを求めるとしても村まで2~3日は要するところです。
- ⑪二人ともただの峠道のはずが、猛吹雪の登降と共に急峻なルートにショックを受け、判断

力が無くなっていたのでしょう。

⑫前年アメリカがアフガニスタンに侵攻した。アメリカ人や白人達がパキスタンを避けたため、カラコルムの山中で出会った所謂外人はこのイタリア人のペアーだけ、お蔭様でバルトロ氷河を独占させてもらいました。

⑬ポーター達も従順で賃上げ交渉など全く出来る雰囲気では無かったようです。